



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「典型的循環」の起源 : A. シュピートホフの経済変動論の方法的特質
Author(s)	小沢, 光利
Citation	北海道大學 経済学研究, 24(4), 169-202
Issue Date	1974-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31304
Type	departmental bulletin paper
File Information	24(4)_P169-202.pdf



「典型的循環」の起源

—— A. シュピートホフの経済変動論の

方法的特質 ——

小 沢 光 利

目 次

- I 開 題
- II 景気研究の一つの総括展望
- III 方法論的背景
- IV 「経済変動論」の方法としての「具象的歴史理論」
- V 結 語

I 開 題

恐慌現象こそは遠くシスモンディ (Simonde de Sismondi 1773~1842) の近代資本主義に対する呪咀以来この生産様式 (Produktionsweise) に独自固有の「謎めいた現象」(M. v. Tugan Baranowsky, *Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England*, Jena, 1901. S. 197) として経験的に認知されながらも、それが「資本主義的生産の最も錯綜した現象」(K. Marx, *Theorien usw.*, in *M-E Werke*, Bd. 26, Teil 2, S. 502) であればこそ、この理論的把握は至難であり、その説明の正否が繰り返し依って立つ経済学の「試金石」として強調されてきたのも偶然ではない。この点に関する限り、世界市場恐慌をもって「ブルジョア的生産のあらゆる矛盾の集合的爆発」(Ebenda, S. 535) と規定しその解明を経済理論体系の総括的位置=最終篇に構想したマルクス(Karl Marx, 1818~1883)と『資本論』への「体系の終焉」を宣して対決したベームパヴェルク (E. v. Böhm Bawerk, 1851~1914) とは奇妙にも一致している。すなわち、後者の表現を借り

れば「恐慌理論は決して社会経済現象の孤立的一部分の研究ではありえない……それは社会経済体系の最終章か最終直前の章をなさねばならず、凡ての社会経済事象とその相互作用の連関に関する認識の成熟した果実でなければならない」(A. Spiethoff, *Die Wirtschaftlichen Wechsellagen*, Bd. I, Tübingen / Zürich, 1955, S. 148 より再引用) と。このため恐慌問題に対する「近代」経済学的接近法も、経済諸学説の多様性に数倍して雑多な趣を呈しているが、そのほとんどが予め幾重にも自己限定された機能主義的モデル分析を中心に据え対象の歴史的基礎を意識的に看過しているため現実分析において失敗を余儀なくされている。こうした中で小論のとりあげるアルツォール・シュピートホフ (Arthur Spiethoff, 1873~1957) の立場は極めて特異なものといえることができるのであるが、あらかじめ本論に先立って簡単な研究史の回顧を通じて予備的考察を与えておきたい。

1930年代の大不況により「ニュー・エライズム」の夢を「手荒く打ち砕」かれて「景気循環に関する既存の諸学説」の蒐集整序のうちに反循環政策の把手を求めたG. ハーバラー (Gottfried Haberler, 1900~) が、シュピートホフにおいて「マルクスを源とするきわめて重要な思考系列の極限」を見出しこれに「非貨幣的過剰投資説」の系譜を与えたことは周知のところである；「シュピートホフの直接の先行者は有名なロシアの経済学者ツガン・バラノフスキーであった。シュピートホフとカッセルが景気循環理論に及ぼした影響は特にドイツでいちじるしかったが、スカンジナビア諸国、またアングロサクソンの国々でも重要であった。ヴィクセルでさえも景気循環に関してはシュピートホフの説を採用している」(G. Haberler, *Prosperity and Depression*, United Nations, N.Y., 3rd ed., 1952. P. 72, 松本達治他訳『景気変動論』, 東洋経済新報社, 1966, [上] 58~59頁)。いわゆる大陸系経済学に与えたシュピートホフの絶大な影響は明らかであるが、言語的制約から英米世界においては当初彼の変動論は十分に理解されるに至らなかった。ちなみに『貨幣論』(*A Treatise on Money*, Vol. 2, London, 1950 p. 100; 1st ed., 1930) において大陸系の景気循環論を賞賛しこれに自から組み

することを表明した J. M. ケインズ (John Maynard Keynes, 1883~1946) もミッチェル (Wesley Clair Mitchell, 1874~1948) の『景気循環論』(*Business Cycles. The Problem and Its Setting*, New York 1927) の「切り詰められ誤解にみちた説明」(A. Spiethoff, a. a. O., S. 2) を通じてシュピートホフの理論を解釈するにとどまっていた。英文の比較的纏った摘要紹介の試みとしては上掲のハーバラーの他に第二次大戦後のハンセン (Alvin H. Hansen 1887~) の *Business Cycles and National Income*, [New York, 1951] を挙げうるのみであり、シュピートホフの包括的な主論稿 Artikel "Krisen" の英文翻訳が公表されるのは初出後四半世紀を過ぎる 1953 年のことである。だが、この時点では既に「近代」的系譜の主潮流は「ケインズ革命」を経て、経済変動の主要関心も「巨視的動態論」から「成長論」を含む「最新」テーマの支配するところとなり、シュピートホフの景気循環学説史上の位置も旧世代の一メモリアルとして触れられるにとどまりもはや十分な検討を経ることなく残されたのである。

一方わが国では、シュピートホフの経済変動論研究は比較的早くから注目されており、古くは高田保馬氏の著作(『景気変動論』日本評論社, 1928) のうちに散見されるし、静田均氏や伊行璽氏の紹介批評の試み(『経済論叢』第 29 卷 1-2 号, 第 40 卷 3 号) の他、望月敬之氏によって "Krisen" の完訳(『景気理論』三省堂, 1936) が果され、戦前期にその全貌が伝えられるところとなっていた。続く波多野鼎氏(「シュピートホフの景気学説」『景気及び恐慌学説批判』岩崎書店, 1948) や青山秀夫氏(「シュピートホフの景気理論とその批判」『経済変動理論の研究』第 2 卷, 創文社, 1958 再録) の研究は、シュピートホフの初期の諸論稿を含めて本格的検討を意図するものであった。その他間接的なものを加えるとシュピートホフのわが国の景気循環論ないし恐慌論(両者は厳密に概念上区別されねばならない) 研究に与えた影響は無視しえないものがあり総じて英米世界に比べて著しい相違をなしているといえてよい。

ところが、これまでシュピートホフ自身が他の景気諸理論との決定的相違

点・差別性をその方法論的立場に求めていることは全く看過されてきた。それは従来の景気循環学説史の構成が超歴史的な機能主義的観点からのみ与えられていたことによると見てよからう。だが、恐慌現象がすぐれて歴史的現象であるだけにその歴史性を無視する歴大な「近代」経済学的景気諸理論の山脈中において「シュモラー学派出身の理論家で限界効用学派出身の歴史家」(E. Salin, *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, 2 te. Auf., 1929, 高島善哉訳『経済学史の基礎理論』三省堂, 1944. 306頁)と特徴づけられるシュピートホフの経済変動論研究は、その方法論的立脚点においてこそ刮目に値し独自の精彩を放っていると考えられるのである。

小論の課題は、総じて没社会的・没歴史的な接近法をその本質的属性とする「近代」景気循環論にとっていわば異端とも見える A, シュピートホフの経済変動論研究の特異な歴史主義的アプローチの方法的特質を解明することである。かつて筆者は、シュピートホフに關説した折、彼の立場を「理論と歴史の総合を目指す非マルクス主義的努力の最善のもの」(拙稿「恐慌論の一面化過程の分析——第一次大戦前夜の『恐慌＝再生産論争』(1896～1913)をめぐる——」北大『経済学研究』第22巻第2号, 1972年9月, 68頁)と評して、その批判的吟味を後日に約したことがあるが、本稿はその責の一端なりと果すべく準備された研究の一部をなす。

あらかじめ、シュピートホフの著述リスト(英文翻訳も含む)を公表年次別に掲げておこう。

シュピートホフ著作一覧(年次別)

- 1902 [1] Vorbemerkungen zu einer Theorie der Überproduktion, *Schmollers Jahrbuch*, 26 Jg., Bd. 2
- 1903 [2] Die Krisentheorien von M. v. Tugan-Baranowsky u. L. Pohle. *Schmollers Jahrbuch*, 27 Jg., Bd. 2
- 1904 [3] Verhandlung des Vereins f. Soz., Pol. über die Störungen im deutschen Wirtschaftsleben während der Jahre 1900 ff., *Schriften des Vereins f. Soz. Pol.*, Bd. 113, Leipzig

- 1905 [4] Die Quantitätstheorie, insbesondere in ihrer Verwertbarkeit als Haussetheorie, *Festgabe für Adolph Wagner zur 70. Wiedrkehr Seines Geburtstages*, Leipzig,
- [5] *Beitrage zur Analyse und Theorie der allgemeinen Wirschaftskrisen*, Leipzig
- 1908 [6] Die Lehre vom Kapital, *Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jahrhundert*, I. Leipzig
- 1909 [7] Die äußere Ordnung des Kapital und Geldmarktes, *Schmollers Jahrbuch*, 33 Jg. Bd. 2
- [8] Das Verhältnis von Kapital, Geld und Güterwelt, *Schmollers Jahrbuch*, 33 Jg. Bd. 3
- [9] Der Kapitalmangel im seinem Verhältnisse zur Güterwelt, *Schmollers Jahrbuch*, 33 Jg. Bd. 4
- 1918 [10] Die Krisenarten, *Schmollers Jahrbuch*, 42 Jg. Bd. 1
- [11] Die Kreditkrise, *Schmollers Jahrbuch*, 42 Jg. Bd. 1
- 1920 [12] Der Begriff des Kapital und Geldmarktes, *Schmollers Jahrbuch*, 44 Jg.
- 1924 [13] Moderne Konjunkturforschung, *Jahresbericht der Freunde und Förderer der Universität Bonn*
- 1925 [14] Kredit und Banken, *Kapital und Geldmarkt*, Berlin
- [15] Artikel "Krisen", *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 4 Aufl., Bd. 6, Jena
- 1926 [16] Die Beobachtung der wirtschaftlichen Wechsellagen, *Wirtschaftsdienst*, 11 Jg., Heft 1
- 1927 [17] Kreditpolitik, Kölner Vorträge : *Die Kreditwirtschaft*, Bd. II, Leipzig.
- 1928 [18] *Der Einfluß der Golderzeugung auf die Preisbildung 1890—1913*, München und Leipzig.

- 1931 [19] Unsere Wirtschaftslage im Lichte der Geschichte, *Leipziger Illustrierte Zeitung*, okt.
- 1933 [20] Overproduction, *Encyclopaedia of Social Sciences*, Vol. XI. New York
- [21] Die Wirtschaftsstile, *Festgabe für W. Sombart zur 70. Widerkehr seines Geburtstages*, München
- 1938 [22] Gustav, v. Schmoller und die anschuliche Theorie der Volkswirtschaft, *Schmollers Jahrbuch*, 62 Jg.
- 1948 [23] Anschauliche und reine volkswirtschaftliche Theorie und ihr Verhältnis zueinander, *Synopsis, Festgabe für Alfred Weber*, Heidelberg.
- 1949 [24] Jeseoph Schumpeter in memorial, *Kyklos*, Bd. 3
- 1952 [25] The "Historical" Character of Economic Theories, *The Journal of Economic History*, Vol. XII
- 1953 [26] Business Cycles, *International Economic Papers*, No. 3 London and New York
- [27] Pure Theory and Economic Gestalt Theory ; Ideal Types and Real Types, *Readings in Economic History*, London
- 1955 [28] *Die Wirtschaftlichen Wechsellagen ; Aufschwung, Krise, Stockung*. Bd. I, Erklärende Beschreibung, Tübingen, Zürich
- [29] *Die Wirtschaftlichen Wechsellagen*, Bd. II, Lange Statistische Reihen

Ⅱ 景気研究のひとつの総括展望

シュビートホフは、その主論稿「恐慌」を初出後30年を経た1955年に若干の増補改訂を加えて独立の著作として復刻することに彼自身「気のすすまな¹⁾いままに同意した」が、これに寄せた現代ドイツ歴史学派の巨頭 E. ザリー

ン (Edgar Salin, 1893～) の「序説・景気研究の現状と課題」は、二年後に84才の生涯を閉じるシュピートホフ畢生の研究の集大成となる復刻版の意義を説くと共に、現代における景気研究のあり方に対する独自の総括的な一展望を与えようとしている。ザリーンの「序説」は、シュピートホフの経済変動論が単なる学史的追憶の対象にとどまるべきではなく、今日的意義の観点から見直されるべきことを主張することにおいて、従来の「近代景気循環論」の系譜づけに対立するものである。ザリーンの狙いは、その冒頭の叙述に見るとおり、「国際的研究の現代的水準に照らしても〔項目一「恐慌」の〕ドイツ語新版が必要不可欠」であり、それは「今日なお景気研究とこれに基づいて組み立てられる景気政策にとって基礎であり模範として有効である²⁾」ことをシュピートホフに代って確言する点にあった。ザリーンは、そうした主張の確証を「近代的」アプローチの没歴史的な限界を指摘することによって得ようと努めているのである。先ずザリーンの主張を通じてシュピートホフの特異な位置を探ってみよう。

ザリーンは、ドイツ歴史学派の伝統に対する過度の「反動」のもとで英米流のケインズ主義経済学が大陸を席捲する「現状」を憂いて伝統的立場への復帰の必要性を説いている。ここで彼が憂慮しているのは、「ケインズ革命のアングロ・サクソンの幅と深さは、ただ英米においては過去のドイツならびにスカンジナビアの諸業績が知られていなかったということからのみ理解できる」ことにすぎず、当のアメリカ、イギリスで「合理的理論 [Rationaltheorie] と計量経済学 [Ökonometrik]」への反省ならびに「具象理論 [anschauliche Theorie] と古い意味での政治経済学」との必要性が再自覚されつつあるにもかかわらず、ドイツ言論界でシュピートホフの意義を主張することには「アングロ・サクソンにおける以上に強い論拠を必要とする」という「ドイツ国民経済学の今日的状況の孕むパラドックス」なのである。³⁾

ザリーンによれば、景気研究において『「純粹の」・『合理的』・時間に関係なく妥当する・恐慌学説』を提示しようとする試みは「合理的理論家の盲目性の印であり無意味な徒勞⁴⁾」でしかないため、「合理的理論」に立脚する「今

日の景気理論と景気政策のほとんどは実りのないもの⁵⁾だとされる。なぜなら、景気変動と恐慌はすぐれて歴史的現象であって「合理的図式」には馴まない性格のものだからである。このことは、ザリーンにとって計量経済学の「一般的欠陥」をも指示するものである。すなわち「エコノメトリックは統計学と数理経済学のエレクトロニッシュな発展として立派な意義をもち時宜に適ったスタイルをもっている。だが、まさに経済変動に関してこれを適用するのは疑問なのである。けだし、エコノメトリックはこれまで経済生活が概して自由に形造ってきたものを数量で計算し操作せねばならないために、軽率すぎるかたちでその統計的または仮設的な数値を経済的、政治的ないし倫理的にさえ義務づけようとする方向に導くからである。」⁶⁾ケインズ主義経済学や計量経済学など「目下愛好されている合理主義理論の邪道」に「警告」を発して彼がこうした苛烈な断定を下す背景には、『『資本家的』経済学者たるとマルクス主義経済学者たるを問わず、ほとんどが第二次世界大戦後の世界経済の発展に関して完全に誤った予測を立ててしまった』⁷⁾という現実があった。彼によれば「第一次世界大戦後の〔経済〕変動を根拠にして第二ないし第三次のそれに照応的な結果を期待するのは、総じて歴史的感覚のない人々にとってのみ可能なことであつた」⁷⁾。

戦後の世界経済発展の予測の失敗を余儀なくさせたのは、第一次大戦後の、顕著には第二次大戦後の「社会の構造変化 [Strukturwandel der Gesellschaft]」の解明が今日の景気研究にとって必須の先決課題となっているということが誤認されている結果だ、というザリーンの指摘は傾聴に値する。問題は「構造変化」の内実にあるのだが、彼においては次の諸事項が無連関に列举されているだけである、——農業人口構成比の低下とその結果としての失業問題の影響の変化、官吏階層の購買力が果していた〔とする〕循環的自動回復力の喪失、一の倒産が国民経済の全運命を規定するほどに至った産業および銀行の巨大化、更に、「植民地主義の崩壊と旧資本主義列強の直接的従属化にあった非資本主義圏の絶えざる縮小、他方で、理念、目標および手段にわたっての反資本主義圏の生成と絶えざる拡大」、これが資本主義国の景気政策

に及ぼす影響⁸⁾。だが、それらの連関ある説明をザリーンに求めることはできない。ただ、こうした諸事実を、その射程内にとりこめない景気研究のあり方に対置するだけなのである。彼の強調点は次にある；「一切の純粹合理的、因果論的ないし機能的景気諸理論がどれほどなお的確になりえようとも、凡ての数量的発展線がどれほど統一的に現象しようとも、まさにそれらの過去における外観的な検証可能性の事実こそは、それらが現在の分析にとって不十分なものであることを推量させ⁹⁾未来の予測にとって不十分なことを確実ならしめている。というのは、常に新たな目標設定が現出し、新しい手段が取り入れられ、絶えず連続性が自発性によって打破され、現存するものが新たに生み出されるものによって変化を蒙り、社会体 [Gesellschaftskörper] の変換ならびに政治的な世界変革と今日では更に心理的、道徳的および人間的な変革に伴う諸作用が絶えず変化するからである」。

ところで、ここで批判の俎上にのぼされているのが、“Keynesianer”や計量経済学者ばかりではなく“Marxisten”も含まれていることに注意する必要がある。たとえば、次の様な指摘がそれである；「マルクスの著作においてもケインズの著作においてもいずれも独断的な部分を含んでいるために Marxisten が存在しえし Keynesianer が存在しえたのである。この場合、人がもし未決問題を発展させて新たな解答を与える代りに彼らの暫定的な学説を石化してしまうならば、どちらもともかく誤りを犯すことになる」¹⁰⁾。ザリーンのいうマルクスの「独断的な部分」とはどういったことを意味しているのだろうか。次の説明がこの間に答えている；「マルクスの恐慌理論は——たとえそれが完成されてはいなかったにせよ『資本論』第一巻から解釈して——それ自体論理的で異論の余地なく誤りないものである。しかも彼の時代（すなわち初期資本主義から高度資本主義への過渡期）の資本主義経済に関するマルクスの分析は、今日なおケインズに劣らず経済循環の模範的・教訓的な説明を含んでいる。にもかかわらず、彼の予測は実現されなかった。労働予備軍の持続的増大はなかったし、資本主義の破局はこれが起ったばあいはいつとも経済的誘因からではなく政治的誘因から政治的手段をもって生じたので

あり、しかも逆に、資本主義は実に旧い資本主義諸国においてこそ意外な生命力と転換能力とを実証したのである。¹¹⁾ここには史的唯物論に対する素朴な反発と「マルクス恐慌論」についての偏面的理解が示されている。つまり、ザリーンの解釈は、前世紀末葉以来いくども反復再製された「資本主義的蓄積の一般法則」をめぐるマルクス批判家達の理解の枠を一步も出るものではない。すなわち、『資本論』の方法的限定(「資本一般」)を無視して直ちに『資本論』第一巻で示された諸傾向法則を未来に対する直接的・具体的予見と解釈して、それに具体的現実の断面を無媒介に対置することによりその予見の「独断性」を反証するというあの陳腐な理解がそれである。^{*}こうしたザリーンの非難こそ逆に文字通りマルクスの「暫定的な学説」を〔歪めて〕石化したものであることを確認すれば、彼の問題にする「合理的理論」と同列に置かれた「マルクスの恐慌論」なるものへの的を失った議論にこれ以上掛かり合う必要はない。

* <補註>

こうした<マルクスの方法に対する無理解>については、つとにH.グロスマン(Henryk Grossmann, 1881~1950)やP. M. スウィージー(Paul M. Sweezy, 1910~)などが先行諸論争の批判的総括の試みのなかで明らかにしてきたところのものであるが、彼らも『資本論』の基本性格に関しては曖昧さを残している。単にマルクスの方法を「抽象的演繹的方法」と捉えて『資本論』第I巻のII・III巻に比しての「高い抽象のレベル」を指摘する(P. M. Sweezy, *The Theory of Capitalist Development*, 5th Printing 1964, PP. 11~20, 都留重人訳, 新評論社版, 11~22頁)だけでは正しいとはいえない。批判家達が専ら問題とした『資本論』第一巻第七篇第23章「資本主義的蓄積の一般法則」を忠実に迎れば、そこでも『資本論』全巻を貫く方法的限定を発見しうるのである。すなわち、第1節でマルクスは「資本の技術的構成が同等不変で資本の増加が生ずるような〔蓄積過程の〕特殊局面」(*Das Kapital, M-E Werke Bd. 23 S. 650*)だけを抽象的に考察することによって、賃銀の変動は「資本の増殖欲に照応する水準」(ebenda, S. 648)に閉じ込められていること、つまり「蓄積の大いさが独立変数であり、賃銀の大いさは従属変数であってその逆ではない」という資本主義的蓄積の最基底の関係を示した後、第2節で、労働生産力の発展の帰結であり・資本主義的蓄積の本来的過程としての資本構成の高度化を伴う「資本の加速度的蓄積」(S. 653)の展開について述べ、「本源的には資本の量的拡大としてのみ現

象する資本蓄積が、資本構成の[・]持[・]続[・]的[・]な[・]質[・]的[・]変[・]化[・]の[・]中[・]で[・]、資本の可変的構成部分を犠牲とした不変的構成部分の[・]絶[・]え[・]さ[・]る[・]増[・]加[・]の[・]中[・]で[・]行[・]な[・]わ[・]れ[・]る」(S. 657) ことを解明した。ところで、ここで、「円形から螺旋に移行する再生産を通しての資本の漸次的増加たる蓄積」(S. 656) = 集積とならんで多数の諸資本相互の競争過程における反発・反作用たる吸引 = 集中運動も、同時に「社会的蓄積の新たな強力なる傾杆」(S. 656~657) として示されているが、ここには次の厳格な叙述留保が付されていた、——「諸資本のこうした集中の諸法則、あるいは資本による資本吸引の諸法則は、ここでは展開されえない。簡単な事実示唆 [tatsächliche Andeutng] で足る」(S. 655), と。この「簡単な事実示唆」においてマルクスは「集中の最も強力な傾杆たる競争と信用」(S. 655) や株式会社制度の資本主義的蓄積過程における決定的な意義にまで言及したのであるが、これらの展開は他の多くの論点と共に別篇『資本論』圏外に留保されていた(久留間敏造『マルクス経済学レキシヨン』①, 大月書店, 1968, 「競争について『資本論』の枠外に残されているものはなにか?」および寺園徳一郎『資本と競争』ミネルヴァ書房, 3~9頁を参照のこと)。さらに、第3節では資本構成の持続的変化に規定される「資本主義的生産様式に独自の人口法則」が説かれた後、「資本主義的蓄積の一般的法則」と併記された問題の第4節が続く。この法則は「資本主義的蓄積の敵対的性格」(S. 675) を総括表示するものであり、「資本の増大が労働者階級の運命におよぼす影響」(S. 640) を「一般的に」定式化したものであって、その限りで異論の余地はない。しかも、ここには明確な限定が付されていた——「この法則は、他のあらゆる法則と同じように、その実現においては多様な事情によって修正されるのであるが、これらの事情の分析はここでの問題ではない」(S. 674) ——のであるが、批判家達は「多様な事情」のいくつかを断片的に対置することによって「法則」の無効を説いたのだった。こうして、『資本論』はこの固有の問題限定——「資本主義的生産の一般的研究」(*M-E Werke*, Bd. 25, S. 152); 「資本の一般的分析」(ebende, S. 245) 等——により、具体的「例証」の他に、いっそう資本主義的蓄積の特殊法則・具体法則の展開をわれわれに要求しているのである。『資本論』における明確な叙述留保がその第3巻に集中しているという事実からしても、資本と賃労働との「運命」に関する問題は、マルクスの「経済学批判」の「一般的結論」から導かれた「篇別」のあの深みから提起されねばならない。なお前述のグロスマンについては、拙稿『資本論』具体化をめぐる H. グロスマンの方法論的問題提起」(北大『経済学研究』第23巻3号, 1973) を参照されたい。

ともあれ、ザリーンは第二次大戦後の景気予測における失敗の事実をもって、Keynesianer, Marxisten を含む一切の「合理的理論」の分析の無力を突き、それらに代る別の方途としてシュピートホフの景気研究の方法を推奨

しようというのである。では、ザリーンのいうシュピートホフの経済変動論の意義はどこにあるのだろうか？

「シュピートホフの理論は、全く意識的に歴史的であり——具象的一歴史的〔anschaulich-geschichtlich〕であって、それ故に、全く意識的に生成と移行の諸法則〔Gesetzen des Werdens und Vergehens〕に服している¹²⁾」。ザリーンは、「シュピートホフの恐慌学説を高度資本主義の変動の具象的理論と特徴づける¹³⁾」のであり、ここから「シュピートホフの〔研究〕手続きは、たとえばその対象が歴史的な性格を有し、したがってまた経過的なものであっても、十分に教導的たりうる¹⁴⁾」ことを主張する。

そこで、直ちに疑問がおこる、「具象的一歴史理論」とは何か？ザリーンのいうシュピートホフの「生成と移行の諸法則」とはどのような性格のものか？そしてシュピートホフの方法は真に今日の恐慌論研究を「教導」しうるものであるのか？等々と。だが、ザリーンからこれらの説明を聴くことはできない。彼の「序説」は、肝心の回答を与える代りに＜権威者＞的漠然さをもった修辭で終わっているのである；「今日も明日も、あらゆる理論と政策について、だからまた、景気のそれにとって次のことが妥当する。すなわち、経済全体を理解し構成するために本質的なものを洞察することのみが、その現状と発展を判断するために具象的理解において直観と論理を結合することのみが、不安と勇気、感情と悟性、期待と意志の凡ての係わり合う力をもって評価することのみが、含蓄ある科学研究と有効な政策行為とを可能ならしめる¹⁵⁾ということ、これである」。

こうして、「景気研究の現状と課題」に関するザリーンの極めて悲観的な展望は、何故にシュピートホフの理論ならびに方法が「今日においても景気研究とこれに基づいて組立てられる景気政策にとって基礎であり模範として有効である」かを説得的に明示することなく終った。だから、シュピートホフの方法が今日の景気研究（というより、恐慌分析）にとって真に有効な指針たりうるか否かの問題は、ザリーンとは別途に考察されねばならない。

1) A. Spiethoff, *Die Wirtschaftlichen Wechseltagen*, [28] Vorbemerkung. S.11

- 2) E. Salin, Stand und Aufgaben der Konjunkturforschung, in [28] S. 1
- 3) E. Salin, ebenda
- 4) ebenda, S. 5
- 5) ebenda, S. 6
- 6) ebenda, SS. 7~8
- 7) ebenda, S. 7
- 8) ebenda, SS. 8~9
- 9) ebenda, S. 9
- 10) ebenda, S. 3
- 11) ebenda, S. 7
- 12) ebenda, S. 3
- 13) ebenda, S. 5
- 14) ebenda, S. 9
- 15) ebenda, SS. 9~10

Ⅲ 方法論史的背景

ザリーンの主張からも窺いうるように、シュビートホフの経済変動論の方法的特質を明らかにするには、あらかじめ「ドイツ国民経済学」の伝統的土壌を知らずしては不可能である。つとに(1933年)シュビートホフの還暦記念論文集の編纂に当りシュムペーター(Joseph Alois Schumpeter, 1883~1950)は、「近代」経済学史上のシュビートホフの位置に触れ次の様に評価した;「ドイツにとって、アルツォール・シュビートホフの名は景気研究の一点たる以上の意味をもっている。この領域における彼の業績から鳴り響いている方法論的音信 [methodologische Botschaft] は、それだけでわれわれに新たな認識を直接与えてくれた業績そのものを遙かに凌いでいる。彼の実例から一定の研究の仕方が習ばれるし、他の目的にも役立つ方途が開かれている。このドイツ歴史学派の嗣子は、彼独自の理論類型をわがものとなし、そして忠実に保持された伝統をこのしかるべき独自の新しい真正なものと結合したのである。そのかくも厳正にして同時に個性的な学説を彼は——計画によってではなく実地に——一連の諸研究のなかで、一連の特殊問題との係わりで発展させたのであり、それらは方法論的論述がなしうる以上に明確に、最善

の意味での実証的経済学説の構築に歴史精神と分析能力とが確証されうる未来の途を指示している¹⁾。シュムペーターは、またその後の大著『経済分析の歴史』の未完の一章（第四篇第四章）で、W. ゾムバルト（Werner Sombart, 1863～1941）、M. ウェーバー（Max Weber, 1864～1920）と並ぶ『「最新」歴史学派』のひとりとしてシュピートホフを位置づけている²⁾。以下、われわれもドイツ歴史主義経済学の展開を辿るなかでシュピートホフの方法論的位置と特質を把握する必要がある³⁾。

ブルジョア経済学のアングロ・サクソンにおける伝統は、理論と歴史を別個の教課として分離することに別段の疑問を起さなばかりか、それを甘受する傾向にあった。したがって、経済理論家と経済史家との境界が暗黙裡に是認されていた訳であり、経済理論は「いうなれば理論家によって構成された後に経済史家によって利用される所与のある概念装置」として理解されるにすぎない。問題なのは、経済理論がどのように構成されるかという点であるにもかかわらず、ここでは、経済学における理論と歴史の関係についての安易な分業が見られるばかりで、両者の相互連関についての立ち入った配慮はほとんど見られない。このことは、イギリス古典派経済学の形成以来ブルジョア経済学の正統的系譜が、近代資本主義社会の生成と発展に肯定的に対応して、自然法的啓蒙主義と個人主義および経済学の属性としての歴史性を無視した経験論的方法を基調とする理論的な永遠調和の体系を志向してきたことと無縁ではない。

だが、後発資本主義ドイツにおいては、その「国民経済学」は初発以来＜歴史的基礎に立脚する経済学＞が志向されていたために、『ドイツ歴史学派』の名をもってその特殊性が論ぜられるのは、今日多くの学史的著作の教えているとおりである⁴⁾。歴史学派の一般的特質は、通常、イギリス古典派との対立面を浮彫りするかたちで、後者の普遍主義に対する前者の個別主義・絶対主義に対する相対主義・永遠主義に対する歴史主義・自然法思想に対する社会有機体観・演繹法に対する帰納法といった対比において理解されているが⁵⁾、これらの対立面は、歴史学派の側からする古典派批判から誘導されたものであ

ることに注意すべきであろう。そして、歴史学派の存在理由は実質科学としての経済学の構成にではなく、その方法論的対立面にのみあったのである。

問題の先鞭は、1840年代以降のいわゆる「旧歴史学派」の諸論者によってつけられた。ロッシェー (Wilhelm G. F. Roscher 1817~1894) は、リカード (David Ricard, 1772~1823) 以後演繹的な傾向を強める古典派経済学の抽象的性格を批判して、経験的・歴史的資料への復帰を説いていた(「歴史的方法」[historische Methode] の提唱)。続いて、ヒルデブランド (Bruno Hildebrand, 1812~1878) は、一歩進んで古典派経済学の諸法則の静態的で超時处的な性格 (the static and timeless Character) に着目し、法則概念を歴史的変化を説明できるような仕方で改変しようと意図して「政治経済学を諸国民の経済発展法則の理論に改造する」ことを提唱したのである。彼の「発展法則」は、それが歴史的性質を具備せねばならない以上、超時处的なものと理解された物理法則と対照的なものとして捉えられざるをえないのは当然であったとしても、具体的に提示されたものは、粗雑な発展類型(経済発展段階論)にすぎなかった。最後に、クニース (Karl G. A. Knies, 1821~1898) は、方法論議に終始しながら、あらゆる理論の「絶対主義」を排するという名目で一切の経済法則(ヒルデブランドの「発展法則」さえも)を否認し、救い難い歴史相対主義に行きついたのである。

歴史主義的アプローチの含む問題点を鮮明に浮びあがらせたのは、C.メンガー (Carl Menger, 1840~1921) による「新歴史学派」の総帥シュモラー (Gustav Schmoller, 1838~1917) への攻撃——いわゆる「方法論争」であった。

シュモラーとその門下は、「旧」学派の理論的一般化への志向を性急なものと見て、理論的課題に先立って経済史的特殊研究に集中することに自己の経済学的任務を限定してかかった。シュモラーはいう、「国民経済学の新時代は国民経済学の歴史的な取り扱いに対するロッシェーやヒルデブランドの一般的な希求からよりは、むしろ経済史的モノグラフィーの時代から始まる⁶⁾」。シュモラーにあっては、史料からの帰納的一般化による「規則性」の抽出を経

経済学の課題と認めた上、そうしたものとしての「法則」の定式化を許すほど十分な史料蒐集がなされていないという理由によって「経済法則」の把握は消極的なかたちで否定されたのである。将来の経済学の実りある発展期は、「現在蒐集されているところの歴史的・記述的・統計的な素材の全集成の利用を通じてのみ到来するのであり、百回も蒸留されてきた抽象的諸教義を蒸留し続けることによってではない⁷⁾」。こうして、シュモラーは理論的課題をあてもなく遠き将来に留保する。

これに対するメンガーの非難は痛烈である；「政治経済学はただそれを歴史的知識と結びつけることによって形成されうるとする誤てる仮定——これは『歴史主義』の誤ったドグマの適用がわれわれの分野において意味するところのものである——は、出発点から失敗を運命づけられていた。いかなる科学もそれ自体の思想領域の内部ないし中心からのみ初めて再編成されうる。……政治経済学は、歴史家・数学者・生理学者やあるいはそうした諸学科の先例に盲従する人々などによっては、その現在における低劣な状態から高められることはないであろう。政治経済学の改造は、ただわれわれ自身によってのみ、すなわちこの特殊科学に従事する学究によってのみ始めることができる」。「ドイツ歴史学派経済学は如何に進歩したか？理論は、そう、理論は歴史的統計的な符号でうわべを飾られ、歴史めぐりで点綴されてきた。ついには、理論的仮面をつけただけの符号と歴史の遊覧だけに、⁸⁾こうした方向での一層の進歩が可能であるとは考えられないところである」。

確かに、当時の歴史学派の無理論性は、エンゲルス(Friedrich Engels, 1820～1895)がブレンター(Lujo Brentano, 1844～1931)を評していった如く「経済学の墮落がどんなにひどいものであるか⁹⁾」を物語るものであった。彼らの標榜する「歴史的基礎に立つ経済学」は、結局なんらかの体系はおろか、ひとつの理論的貢献すらなしえなかったものであり、せいぜいのところ彼らが対抗した古典派理論の個別命題のいくつかを歴史的素材で水増しする以上に出なかったのである。その限りで、上のメンガーの指摘は説得的でさえある。

メンガーの意図は、一に、歴史的資料から抽出される「経験法則」こそ経

経済学の主対象であるとなす主張を批判し、帰納的、「現実經驗的 [realistisch-empirisch]」接近法を用いる歴史家と純粋に演繹的で「精密 [exakt] な」接近法を用いる理論家を区別することであり、二に、社会現象を相互依存的に捉えて経済的・法律的・心理的諸現象の取り扱いを区別せず同一研究のうちに雑然と取り入れた歴史学派に対して、諸科学の境界を主張し、独立科学としての「精密経済学」の自律性を防衛しようとするに¹⁰⁾あった。だが、メンガーの「精密経済学」は、その結果、現実の資本主義経済という實在（対象）の反映性を無視する観念的理論構成——経済学の主観主義・形式主義化を公然と掲げるものとなった。彼が敢えて「精密的」と呼ぶ接近法の課題は、先ず「現象の定型（現象形態）」を確定し、「一定の種類の厳密に定型的な現象には同一の事情の下では常に同じく一定の他の種類の厳密に定型的な現象が、しかも吾々の思惟法則からして正に必然的に¹¹⁾継起しなければならぬ」とする「認識規則」を絶対の基準として、「現象の定型的関係」たる「精密法則」を確立することに限定されたのである。やや後に、こうしたメンガーの立場をジェヴォンズ (William S. Jevons, 1835~1882) ワルラス (M. E. Léon Walras, 1834~1910) と共に「『近代』理論家と呼ぶ」ことによって、古典派および歴史学派と区別し、この「新学派」に組みすることを宣言したシュムペーターは、この新たな「経済学」観を一步進めて定式化した；「ここに於いて我々の理論の行なう説明は、能う限り簡単にして普遍妥当的な定式を以て我々の体系の諸要素間の函数的関係を記述することである。さてこの定式を『法則』と名づける」、そして「かようにして単に記述のみを、しかも或る種の函数的関係の記述のみを理論は我々に提供する。理論がこれ以上を与え得ると信ずるのは一の錯覚である¹¹⁾」と。

つまり、メンガー流の「経済学」においては、もはや「経済法則」という名称がただ主観の構成に懸るものとしてのみ残っても、客観的経済法則の把握は断念され、歴史的實在のうちに理論を追求しようとする意図そのものが否定されてしまったのである。ところが、ブルジョア経済学の方法論的自己分裂（「方法論争」）の結果は、その後の展開から推してメンガーの流れを首

座につかせることになり、と同時に歴史学派内部での深刻な方法論的反省を促すことになった。

ところで、ドイツでは、W. Dilthey (1833~1911), W. Windelband (1848~1915), H. Rickert (1863~1926) などの観念論哲学者達によって、歴史関連諸学科の特殊性——すなわち、人事的側面を重視し、そこに抽象化ないし一般化よりも個性的独自性や歴史的一回性の叙述を主要課題と定めることにおいて、自然科学との認識の差を暗黙のうちに自覚していた歴史家達の史料編纂の方法に、明確な認識論的根拠が与えられていた。「精神科学の方法[geistwissenschaftliche Methode]」¹²⁾と呼ばれるものがそれであるが、そこに方法論的根拠を求める歴史学派の自己批判ともいうべき動きこそ、M. ウェーバー、W. ゾムバルトそして問題のシュピートホフの試みである。それらは、メンガーに痛撃されたシュモラー流の実証的歴史研究の無理論性を超克しようとする「歴史学派の子」達の努力といえるのであるが、この子達の段階では、先にシュモラーによって内気に否定された「経済法則」の定式化という問題が認識論上の根拠を得てより積極的に「法則」概念の排除というところまで進んでいたことに、あらかじめ注目すべきであろう。リッカートの言を引けば、「歴史法則は発見がやや困難だというぐらいのものではない——歴史法則というまさに概念自体が内部矛盾を含んでいるのだ。歴史科学と法則定立的科学とは相互に排他的である」と。こうした見地に立てば、「法則」概念に代って経済認識の別の方途が求められざるをえないのも必至であろう。ウェーバーの「理念型 [Idealtyp]」、ゾムバルトの「経済体制 [Wirtschaftssystem]」そしてシュピートホフの「経済様式 [Wirtschaftsstil]」という「形態類型 [Gestalttypen]」の考えは、そうした方向の具体的所産であった。

以下、極く簡単にそれら三者の諸特徴を比較対照して押えておこう。

ウェーバーの「理念型」の特徴は、先ずそれが対象から独立に案出される認識主体の恣意的な知的構成物 [Denkgebilde, deliberate mental constructs] であるという点にある。もっとも、そこにはなお分類的性格の混入がみられるにせよ、彼が「理念型」をもって「ユートピア」と同義とする時には、それは

歴史的實在との何らの対応も有しない純然たる主観の産物（思惟図式）にすぎないことは明確である。第二に、「理念型」はあくまで探究の帰結ではなく、探究の手段・ツールとして、つまり比較基準として役立ち記述的な歴史素材の混沌^{カオス}を秩序だてるに役立つべきものである。第三に、「理念型」の構成そのものは、歴史に関する研究者のヴィジョンに依存するのであって、これは結局「精神科学の方法」たる「理解の方法 [Verstehende Methode]」に規定される。Verstehen の語意は、本来歴史事象の理解において「行動状況を解釈者のいくつかの個人的体験に対応するような仕方——普通には感情状態の見地から——分析すること」という純個別主観的定義も与えられるが、ウェーバーにおいて、むしろ特定の歴史的・時代的に分有されている思想なり動機（いわゆる「客観精神 [objektiver Geist]」）からする歴史状況の「理解」が問題とされていたと見れば、後のゾムバルトに極めて近いものとなろう。

「理念型」は、歴史的個体の記述であれ諸思想であれ、あらゆる「文化科学」の領域を包摂しうる発見的方法手段とされながら、かかる適用を経済学において見ることはできない。というより、ウェーバーにおいては、経済学の客観的对象自体が初めから存在しないのであって、個々の研究主体の主観的で有限な認識関心（「文化価値観」）に応じた多様な諸「理念型」が社会諸理論として対等の存在理由を保障されたのである。だから、実はウェーバーには、独自の経済学の方法なり理論はなかったというべきであり、ただ、せいぜい「〔経済学〕理論はあくまで理念型でしかなく、そういうものとしてのみ、オーストリア学派の理論は経済理論としてすぐれた価値をもっていると認められた」¹³⁾にとどまるのである。ウェーバーの理解する経済理論とは「実は、『理念型』として解し直されたメンガーの理論であった」¹⁴⁾とすれば、先に見たメンガーの経済学の自律性という要求は、まことに皮肉な方法的救援を受けたことになる。

とはいえ、以上のようなウェーバーの「理念型」にその後の「近代」経済学の諸論者が方法論的拠り所を求めない筈はなかった。なぜなら、ウェーバーの概念構成の方法は、客観的对象を顧慮することなくあらゆる主観的な仮

説設定を平等に許すものに思われたからである。¹⁵⁾

ゾムバルトの「経済体制」は、歴史学派の発展段階説——ヒルデブランツヴァルトシュワットジステムの「自然経済、貨幣経済、信用経済」、K. ビューシャー (Karl Bücher, 1847～1930) の「家内経済、都市経済、国民経済」——に見られる単一指標による機械的段階区分を批判し、経済生活の全体性を多数の指標から把握するために構想された「形態理念 [Gestaltidee]」である。それは経済発展段階論に代る認識対象としてゾムバルトによりウェーバーの「理念型」の実例として提唱されたものであったが、具体的に示されたものを見れば、歴大な史料の整序概念として歴史的現実への近接を余儀なくされている。すなわち、ゾムバルトは『近代資本主義——端初より現代に至る全ヨーロッパ経済生活の歴史的体系的叙述』の課題を「800年から1900年の11世紀間に支配的だった種々の経済体制が発見され、まず概念的純粋性において(「理想型に [idealtypisch]」) 叙述」することに定めた上で、三つの「経済体制」——a) 農民のおよび領主的自給経済としての二重形態における自給経済、b) 手工業、c) 資本主義、を区別する。¹⁶⁾ 各「経済体制」に應ずる時期区分が「経済時期 [Wirtschaftsepoche]」と名づけられ継起的なものとして扱われるが、しかし「経済体制」間の交替・移行の内在必然性は形態理念としての性格により問題となりえない。¹⁷⁾ つまり、「経済体制」そのものは、あくまで歴史的過去に関して、技術 [Technik]、組織 [Organisation] および経済精神 [Wirtschaftsgeist] の三標識に照らして析出された形態類型なのである。ところが、ゾムバルトは「国民経済学とは、経済体制に関する学である」と定義するのであるから、¹⁸⁾ 経済学は経済史と区別される必要もなくなってしまう。

そして、最も決定的なことは、ゾムバルトにおける「経済精神」という独自の概念——これは「理解の方法」の適用に他ならない——の意義づけである。「なかんずく、私が努力したのは、ある一定の経済時期をそれぞれ支配したところの精神を、つまりこの時期の経済生活がそこから形成されたところの精神を探求し、その活動を追求することだった。異なる時代に応じてそれぞれ異なる経済意思 [Wirtschaftsgesinnung] が支配したということ、そし

て自からそれにふさわしい形態を与え・これによって経済組織をつくり出すものは精神であるということ、これが本書『近代資本主義』の根本思想である¹⁹⁾。ゾムバルトは更に言明する；「歴史を書くということは、いかなる道筋を経て国民精神 [Völkergeist] がその目標に近づくか、何がその努力を促進し何がそれを妨げるか、を証明することである。換言すれば、いかなる範囲でいかなる手段によって、ある国民ないしある国民群の根底に横たわる理念が実現されるかを示すことである。……近代資本主義の歴史を書くということは、時代の経過につれて、いかに資本主義経済体制の理念が事実に転化するか、いかにヨーロッパ諸国民の経済生活がそのすべての分野において新たな精神から発展するかを描くことである」²⁰⁾。ここには、ドイツ古典哲学の伝統たる観念的歴史観、とりわけヘーゲル (Georg W. F. Hegel. 1770~1831) の転倒的歴史哲学が明瞭に再現されている。

だが、そもそも「客観精神」とは一体何であろうか。これを「英米の人類学者の慣用語たる『文化』、つまり信念・習慣・造形物 [artifacts] およびあるひとつの社会の諸制度の全総和と同意味」²¹⁾と解釈しても、ますますその実体は曖昧模糊として判然としない。ウェーバーやゾムバルトの経済学から「社会学」への転換傾向は、そこに由来するといつてよい。つまり、経済過程の分析に際し、その千差万様の表象ゆえに心理的・道德的・文化的・政治的・経済的・自然的・技術的等々雑多な諸契機にそのつど幻惑されて理論的逡巡を余儀なくされたシュモラーの苦悩は、ウェーバー、ゾムバルトにおいて独自の方法を得て経済学の経済史への解消、ないし経済学の「社会学」化という形でその発現舞台を変えたのである。だが、ウェーバーの「理解社会学」が社会総体の歴史法則の認識を断念し、脱経済学的不可知論の方向を直截に辿るものであったとすれば、ゾムバルトの「理解経済学 [verstehende Nationalökonomie] は精神史観に立脚しながら経済社会の総体的把握の志向を含むものであったことは確かである。そして、シュピートホフの「経済様式」^{ヴァイルトシヤフトスタイル}は、この総体認識というゾムバルトのねらいにそって構想されるばかりではなく、「シュピートホフの経済様式論は、ゾムバルトの経済体制論に使用され

ている概念の不明確さを改めるという方法を採用して展開せられる²²⁾」のである。

ゾムバルトの「体制」が「^{システム}発生的一体系の叙述」を意図するものであったのと異なり、シュピートホフの「経済様式」は、論理的・一貫性を要求されるものではないとされる。「^{スタイル}様式」は、ある基礎的な諸原理から演繹されえないのであって、その内的首尾一貫性は芸術作品の如く可視的な形態の統一性に依存している。それは、ウェーバーの「理念型」のように「その概念の純粋性においては現実のうちどこにも経験的には見出されえない」というものとは異なり、「独自の現象を包括する現実の模写 [Abbild]」という意味で「現実型 [Realtyp]」たることが強調される。と同時に、「模写」は「写真ではなく絵画」であって、結局のところ画家に擬せられた研究者の主観的観点の下で描かれることになる。

シュピートホフの「経済様式」は、ゾムバルトの『近代資本主義』における如く実質的展開の場をもたず、「様式」を構成する諸指標が提示されるだけにとどまっているため、立ち入った吟味に不適である。とはいえ、以上に見た限りで、シュピートホフの方法論的系譜は明らかである。すなわち、「彼は個々の点では多くの差異がみられるにせよ、マックス・ウェーバーやゾムバルトに類似しているものであり、結局のところヴィルヘルム・ディルタイのいう意味での精神科学的傾向に規定されていたし、従ってまた、自然法則を人間によって規制される経済生活に転用することには反対であった²³⁾」。この系譜の共通点は、経済社会の客観的法則の存在を拒否する結果、主観と客観の中間に認識対象としての形態類型を^{グシユタルトチュベン}設定するという方法的手続にある。もちろん、ウェーバーからシュピートホフまでの間には、ゾムバルトの精神史観（「経済体制」）をはさんで、ウェーバーの徹底した不可知論ならびに概念構成の対象からの遊離（「理念型」）とシュピートホフの——ウェーバー的見地からすれば「概念実在論」として排撃される筈の——独自の「模写」論（「経済様式」＝「現実型」）との距離があった。「経済様式」については、未だ具体的構成が示されていないことから不明確な点も多いが、それは単に歴史的過去に関するひとつの解釈論に終る可能性が強い。「経済史理論としての『経済様式論』」

として紹介されるゆえんである。またその「経済史」にしても、歴史の基底を貫く客観的動因を求めるものではない以上、予想されるのは相互連関を欠く個別史の集成（ウェーバー）か精神史観（ゾムバルト）にならざるをえない。

以上の如き「経済様式」の特徴点からは、そのまま彼の変動論研究の方法的特質は分明とはならない。シュピートホフのヨリ一般的な経済理論観としての「具象的一歴史理論」“anschaulich-geschichtlichen Theorie”こそ、「経済様式」の構想を支えたものであり、前節でザリーンが力説していたように、シュピートホフの変動論研究の方法となっていたものである。

- 1) J. Schumpeter, Vorwort zur Spiethoff-Festschrift *Der Stand und die nächste Zukunft der Konjunkturforschung*. München, 1933, S. V
- 2) J. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, New York, 1954, pp. 815 ~816. 東畑精一訳『経済分析の歴史』第5巻, 岩波書店, 1713—1716頁
- 3) 以下の叙述は, F. C. Lane & J. C. Riemersma, Introduction to Artur Spiethoff, *Enterprise and Secular Change — Readings In Economic History*, edited by F. C. Lane & J. C. Riemersma, London, 1953, に負うところが大きい。
- 4) ここでは特に, 西村孝夫『経済学体系と歴史』(未来社, 1962)を挙げたい。
- 5) 板垣与一,「歴史学派」(『経済学研究の栞——経済学説篇』春秋社, 1948, 133頁; 増補新版『政治経済学の方法』勁草書房, 1963, 346頁), 出口勇蔵,「歴史学派」(増補『ウェーバーの経済学方法論』ミネルヴァ書房, 1964)も参照されたい。
- 6) G. Schmoller, *Ueber einige Grundlagen der Sozial-Politik und Volkswirtschaftslehre*, Leipzig, 1898, S. 119
- 7) do., Zur Methodologie der Staats-und Sozialwissenschaften, *Schmollers Jahrbuch*, Bd. VII, 3. Heft, 1883, S. 242
- 8) C. Menger, *Die Irrthümer des Historismus in der Deutschen Nationalökonomie*, Wien 1884, SS. iv~v, u. S. 50
- 9) Brief an Danielson von Engels, *Briefe über Das “Kapital”*, Berlin 1954, S. 312. 岡崎次郎訳『資本論に関する手紙』(下) 国民文庫, 355頁
- 10) Carl Menger, *Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, und der Politischen Ökonomie insbesondere*, Leipzig, 1883. 福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』, 岩波文庫, 1939,「第四章」59—77頁参照
- 11) J. Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen*

- Nationalökonomie*, Leipzig, 1908, 安井琢磨・木村健康訳『理論経済学の本質と主要内容』, 日本評論社, 1936, 40頁および44頁
- 12) 板垣与一「経済段階理論の問題とその展開」(前掲『政治経済学の方法』, 第三章) は, 筆者と視角を異にするが参照されねばならない。
- 13) 出口勇蔵, 『ウェーバーの経済学方法論』前掲, 108頁
- 14) 出口勇蔵, 同上, 240頁
- 15) 「理念型」と近代経済学のモデル・アプローチ論との関連性については, 岩崎充胤『現代社会科学方法論の批判』(未来社, 1965) 156—162頁, を見られたい。
- 16) W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, 1. Band, 1. Halbband, Leipzig, 1924, S. 23; 岡崎次郎訳『近世資本主義』第1巻第1冊, 生活社, 1942, 28頁
- 17) この点に関しては, ゾムバルトとマルクスの段階論的思考の対比を通じて社会の構造変革を問題とした大塚久雄「社会変革とは何か」(『著作集』第9巻, 岩波書店, 1969, 収録) が興味深い。マルクスの「経済的社会構成」とゾムバルトの「経済体制」を「構造」という概念で一括されている点に疑問を感じるが, 次の指摘は首肯しえよう——「……マルクスの思考様式においては, 一つの生産様式から次の生産様式へ, したがって, 一つの社会「構造」から次の社会「構造」への移行の運動法則と, 「構造」変革の必然性を理解するための道が開かれ, また, 「体制内的段階論」が「体制間的段階論」へ論理的必然性をもって繋がっていくことになる。……ゾムバルトは, 二つの経済体制を支配する「精神」ないし「原理」から次の経済体制を支配する「精神」ないし「原理」への移行の問題を科学的認識の視野から追放することによって, 自己の理論の科学的であることを保証しようとした」(同書, 343頁)。
- 18) 19) W. Sombart, ebenda, S. 21 u. SS. 24~25, 同上訳書, 21頁および30頁
- 20) W. Sombart, ebenda, S. 330; 岡崎訳, 第2冊, 480頁
- 21) F. C. Lane & J. C. Riemersma, op. cit., p. 440
- 22) 秋草 実, 「シュピートホフの経済史理論としての『経済様式論』」『山口経済学雑誌』第22巻1・2合併号, 1973, 40頁。これは, 冒頭の著作リストNo. [21] の忠実な紹介を与えている。
- 23) Gustav Clausing, Arthur Spiethoffs wissenschaftliches Lebenswerk, *Schmollers Jahrbuch*, 78 Jahrg., 1958, II Halband, S. 259

IV 「経済変動論」の方法としての「具象的一歴史理論」¹⁾

シュピートホフによれば, “anschauliche Theorie” と呼ばれる方法に着目したのは, J. シュムペーターが最初であり (J. Schumpeter, Gustav von

Schmoller und die Probleme von heute, *Schmollers Jahrbuch*, 50 Jahrg, 1926), これにザリーンが名称を与えたと注釈されているが、²⁾ シュムペーターにせよザリーンにせよ、いずれも具体的に念頭に置いていたものがシュピートホフの変動論研究 (Artikel "Krisen") であったことだけは確かである。³⁾

彼の特殊に方法論的な研究が、その生涯の後期に属していることは、前掲の著述リストからも知れるところであり、それらが凡て主論稿「恐慌」以後のものであることに注意する必要がある。方法論的作業のうち、主要なものは、[21][22][23][27] を挙げうるが、それら難渋錯雑な論議のシュピートホフ自身による比較的明解な摘要が「恐慌」復刻版の「序言」で示されているから、以下では、これにそって検討したい。

この方法論に関する摘要は、シュピートホフによれば、彼の変動論 (項目一「恐慌」) に向けられた諸批判への一括回答に代りうる意義をもっている。シュピートホフは自己の立場を再度表明しようと努めている；「私の〔項目一「恐慌」における〕『説明的記述』["erklärende Beschreibung"] は、二種類の理論、すなわち、歴史理論と具象理論を用いているのであるから、私の変動学説は歴史—具象学説である」。彼が、ほぼ30年間に渡り、「純粋理論の代表者達によるたび重なる烈しい宣告的な攻撃」への反論を留保してきたのは、変動論に適用された方法が「未だ体系的に明確化されていなかった」からである。その後の方法的研究を経て、今や「これまで果さなかった回答をできるだけ簡潔に与え」ようというのである。⁴⁾ 先ず、彼の主張を聴こう。

理論展開には二様の方法が区別されるべきで、そのひとつを「純粋理論」[reine Theorie] として、これにケネー、リカード、チューネン、メンガー、ワルラス、ジェヴォンズ、クラーク、パレート、シュムペーター、ケインズの名を連ねうるとすれば、「他方の種類の理論は、重商主義者、リスト、シュモラー、ゾムバルト、マックス・ウェーバーによって展開されたものであり、私自身もこの系列上に身を置いている。その理論の呼称は統一的ではなく『経験—現実的』、『具体的』、『具象的』理論と呼ばれている」。シュピートホフは、両理論の性格を比較対照して、第一に「抽象」の違いを指摘する。

いずれの理論にあっても「抽象」は不可欠であるが、両理論の差は単に抽象度の差といったところにあるのではない。「純粹理論」における抽象は、一定の課題に適合するように加工された「資料 [Daten]」に基づいて研究されるから、いかに抽象度が薄められようとも「現実性」に達することはない。ところが「具象理論」の「所与性 [Gegebenheiten]」は、現実の「歴史的一回性 [geschichtlichen Einmaligkeiten]」から抽象され、多面的で綿密な観察によって発見されたところの「現実の規則性 [Regelmäßigkeit der Wirklichkeit]」であって、一定の研究上の関心といった観点から恣意的に加工されるものではない。第二に、「孤立化 [Isolierung]」においても、「純粹理論」の場合には個別的研究に応じた恣意的分離が行なわれるのに対して、「具象理論」においては個々不分離で全体として存在するところの・規則的で本質的なものが孤立化される。そして第三に、「純粹理論は合目的に加工された思惟モデルを用いるが、具象理論は、現実型 [Realtyp], すなわち歴史的一回性から純化された現実性 [von geschichtlichen Einmaligkeiten bereinigten Wirklichkeit] を用いて研究される」。第四に、「純粹理論」の「資料」は技術的補助手段として案出されるものであるのに対し、「具象理論」の「所与性」^{ダーテン}は現実の観察を通して発見される本質的規則性である。最後に、両理論によって得られる「成果」の面で差異が生ずる。「純粹理論は理論的生成の規則的経過を展開し・その成果はひとつの教義 [Lehrsatz] たるにすぎないが、「具象理論」は「説明的記述」を展開し・その成果はひとつの現実の模写 [ein Abbild der Wirklichkeit] ⁵⁾を示している。

ところが、こうした「具象理論」は同時に「歴史理論」としてのみ初めて十全な意味をもつものとされているので、その両側面の関連をシュピートホフの別稿で補って捉えておこう。そもそも「理論」とは「一般化の性格をもつ認識」であり、「歴史」とはあくまで個性的独自の現象である、という形でその間に絶対的深淵を置く問題設定こそ、シュピートホフの出発点であった。シュピートホフが「歴史理論」という場合、その「歴史的」という語にこめられている内容は、「時(間)の変化に服している諸現象の個性的独自性

「uniqueness」という意味」で用いられているのであるが、その限りでは、超時处的な経済理論を退け・時（間）に制約された理論 [a time-conditioned theory] を志向した歴史学派の伝統的課題に「直接」答えようとするものであった。⁶⁾ シュピートホフによる問題の解決は、「一般化」が可能なのは対象自体が超時处的である場合のみならず、時（間）に制約された対象においてもそこに斉一性が確認される限りにおいて、「理論」＝「一般化」の主題たりうるとすることに求められる。すなわち、時（間）に制約された経済現象を取り扱うという意味では、「具象的理論」は、つねに同時に「歴史理論」であるが、その主題とするところは、単なる個性的独自性（それは理論的处理に馴染まないと理解されている）ではなく、「繰り返される斉一性 [recurring uniformities]」にある。⁷⁾ というのである。

以上の方法的主張を、彼は経済認識の諸接近法の「一般的シェーマ」の中で次の如く要約している；⁸⁾

1) 非歴史的理論

時の変化に属さない不変の斉一性を示す現象を孤立させるモデル、または、現実との対応を一切もたない任意モデル [arbitrary models] を用いる。

2) 歴史理論

- a. 「理念型」をツールとして用いる純粹理論
- b. 「現実型」をツールとして用いる具象理論（経済形態論）

3) 経済史

個性的独自性の記述

こうして見ると、先の「経済様式」の意味も一層明確である。つまり「経済様式」という概念は、その助けによって時（間）の流れにおける斉一性が理論的研究に役立ちうるようにされるところのツール⁸⁾であり、「具象理論の道具 [das Werkzeug der anschaulichen Theorie]」なのである、と。

それでは、この「具象的一歴史理論」は、どのようなかたちでシュピートホフの変動論研究に生かされていたのであろうか。彼自身述べているように、

あくまで彼の生涯の主要テーマは経済変動の問題に置かれていたし、方法論的熟慮もその過程での副産物であると共に実質研究の一般的結論として提示されていたのであるから、ここが肝心である。⁹⁾

凡ての景気循環現象がそれぞれ個性的独自の容相を示し、歴史的にのみ説明されうるものであれば、「その範囲において景気循環は経済史の主題である」。だが、「景気循環は総称的現象 [generic phenomena] でもあり、どこで、いつ、その現象が生起しようとしても、本性上斉一的であり厳密な類似性を示している。だから、景気循環は経済形態の『歴史』理論 ["historical" theory of economic Gestalt] (具象的一歴史理論) の主題ともなりうるのである。景気循環は時(間)に制約されているということ、そしてそれは資本主義の様式に属し、この様式の内部で典型的現象を表現するものであるということ、がハッキリと理解されねばならない。資本主義が本質的な点において変化するかあるいは完全に消滅するかしたとすれば、景気循環もその諸特質を変ずるか消滅してしまうであろう。景気循環論は、その様式の支配するところについてのみ適用しえるが、これが支配する限りは一般的に妥当する。すなわち、それは『歴史』理論なのである」¹⁰⁾。

「私の変動理論は、あらゆる具象理論と同様にひとつの歴史理論であって、それは一定の一回的な歴史的状況、すなわち、主として自由市場経済をとる高度資本主義経済様式の優位によって刻印された一時代について妥当する」。「試みなければならないのは、この様式の現実型を捉えることである。私は、好況・恐慌そして不況という循環を、その対立的推進力の下で高度資本主義の展開が演ぜられるところの・この経済様式の展開形態として特徴づけている。1822年から1913年までの期間が、この経過を最も攪乱なく具現しているのであり、この時期が私の分析と理論の基礎になっている」¹¹⁾。

かかる方法的見地から、シュピートホフの経済変動の「説明的記述」は六部構成をもって展開されたのである——Ⅰ 基本的諸現象と基本的諸概念、Ⅱ 経済変動の独自の諸現象、Ⅲ 経済変動の循環；変動段階と変動周期、Ⅳ 経済変動の歴史的経過、Ⅴ 経済変動に関する諸学説、Ⅵ 経済変動の説明。

このうち、従来、景気理論家達の論議の組上にのぼされたのは、主としてⅥの部分に限定されていたので、復刻版にそって若干の注解を加えてみよう。

I は、好況・恐慌・不況の基本的諸現象の概念的確定に充てられる、「われわれは経済変動を一つの現実型として把握しようと思う。この現実型は、回帰的な歴史対象の諸規則性をその歴史の一回性の純化のもとで表現する。したがって、経済変動の現実型は、歴史的な諸事実について観察された規則性の成果なのである。一経済変動は投資および間接消費の増加または減少のおこる一期間 [Zeitabschnitt] であり、この場合、増加する時期が好況であり減少する時期が不況と名づけられる。一変動段階 [Wechselstufe] は変動の特有の発展である。優勢な好況年または不況年からなる一期間 [Zeitspanne] は、一変動周期 [Wechselspanne] である。好況の年数が支配的であればそれは好況周期であり、不況の年数が多ければ不況周期である。¹²⁾」Ⅱでは、経済変動の独自の諸現象が「主循環 [Musterkreislauf]」を中心に一層詳細に説明される。この部分は、アメリカの G. アクレイ (Gardner Ackley) が N. B. E. R. (米国民経済調査局) ——とその総括者 W. ミッチェル——の「アプローチと哲学とに多くの類似性」を発見して、『『決定的なものから非本質的なものを、偶然的なものから規制的なものを』区別し、『歴史的事象から純化された現実性』のモデルを構築して広汎な活動領域にわたって景気循環における典型的なビヘイヴィア・パターンを組立てる努力』と特徴づけたところのものである。¹³⁾ここで示された「主循環」は、1822年から1913年までのほぼ百年間に渡る経験的事実から「現実型的に」"realtypisch" 把握された概念であるとされ、この典型的循環がシュビートホフの変動論において中心的位置を占めている。Ⅲでは、経済変動が「主循環」を構成する五「段階」——好況(第2上昇→最活況→資本不足)⇒恐慌(信用崩壊)⇒不況(下降→第1上昇)——に図解されて概括され、さらに、数十年に及ぶ「大律動 [Großer Rhythmus]」が「変動周期」として時期区分されている。後者に関しては、単なる事実指摘にのみとどまり、説明づけが与えられていないことに注意すべきであろう。Ⅳは、恐慌史の概観を与えているが、「旧時代」、「初期資本主

義」(16～18世紀)、「過渡期」(1790～1821年)について「高度資本主義的経済変動の前史」が叙述された後に、彼の「主循環」の現実的背景となった「自由市場経済的・高度資本主義国民経済の変動過程」(1822～1913年)の歴史的概観が与えられている(なお、「1929年以後におけるドイツ経済不況と1931年の信用逼迫」は復刻版への追補部分である)。Vは、シュビートホフ自身の経済変動の説明(VI)に先立つ学説検討に充てられている。VIこそ、初期の恐慌に関する諸論作(主としてリスト[1],[2])とならんで「近代」理論家達のはば一致した評価によって知られている部分である。それは、景気循環の根幹を投資率の変動に求めた点、ツガンと分かち合う貯蓄—投資分析への貢献と混乱、景気反転の契機としての投資の飽和についての考え方、シュムペーター的「革新の波」のアイディア等々と「近代的」に翻訳されて伝えられているところのものである。¹⁴⁾もちろん、こうした解釈に対してシュビートホフ自身は不満であったことが、彼の方法論の再提示をもたらしただといっ

よい。

以上の全体構成の個々の問題点に立ち入って見るだけの余裕はない。ここでは、シュビートホフの方法論的特質だけを確認すれば当面の課題を果たしたことになるからである。

- 1) “Wirtschaftliche Wechsellen” は、シュビートホフ独自の用語であり、望月敬之『景気理論』では「経済交替」および「景気交替」という二様の訳語が与えられているが、本稿では、これを見て「経済変動」と訳出する。独文を直訳すれば「経済交代状態」ともいえるが、その内実に即していえば「経済変動」が比較的妥当と思われるからである。英文では[26]の様に“Business Cycles”で一括されている。
- 2) F. C. Lane & J. C. Riemersma, op. cit., pp. 442～443, note (22)
- 3) “anschauliche Theorie” は、高島善哉『経済学史の基礎理論』(前掲)や大泉行雄訳(W. オイケン『国民経済学の基礎』勁草書房, 1958)では「直観理論」、板垣与一『政治経済学の方法』(前掲)では「観照的理論」と、それぞれ訳出されている。又、F. Ledlich による英文([27])では、“economic Gestalt theory”の語が充てられているが、本稿では「具象理論」という訳語を用いる。
- 4) A. Spiethoff, *Die Wirtschaftlichen Wechsellen*, a. a. O., S. 11

- 5) A. Spiethoff, ebenda, S. 12
- 6) A. Spiethoff, The "Historical" Character of Economic Theories, [25], pp. 132~134
- 7) A. Spiethoff, ibid., p. 136
- 8) A. Spiethoff, ibid., pp. 136~137
- 9) A. Spiethoff, Briefliche Äußerung von 1933, in : G. Clausen, a. a. O., S. 258
- 10) A. Spiethoff, The "Historical" Character of Economic Theories, op. cit., p. 139, note (15)
- 11) A. Spiethoff, *Die Wirtschaftlichen Wechsellagen*, a. a. O., S. 13
- 12) A. Spiethoff, ebenda S. 17
- 13) G. Ackley, Spiethoff's Views on Business Cycle, *KYKLOS*, Vol. VII, 1954, p. 283
- 14) A. H. Hansen, *Business Cycles and National Income*, op. cit., pp. 292~300 および G. Ackley, op. cit., pp. 284~285

V 結 語

景気循環論の歴史的基礎からの意識的離脱こそ、景気諸「理論」の構成を可能とさせているかのような近時の学史の流れにあって、シュビートホフの「具象的一歴史理論」の立場は、その独自性においてまことに際立っていた。では、彼の僚友ザリーンがわれわれに約束したように、その方法が今日における景気研究を「教導」しうるに足ると考えることができるであろうか？

答えは、極めて否定的である。というのは、彼の「具象的一歴史理論」は既に見たように現在および未来予測を断念するところに成り立っていたからである。理論の対象となりうるのは「現実型」すなわち「歴史的一回性から純化された」規則性ないし反復性であるという前提に立って、「かりに景気循環が斉一性を示さなかったならば、またかりに個々の循環がそれぞれ他の循環の原因と本質的に違う原因をもっていたならば、われわれはどのような景気循環理論ももつことはできなかったであろう¹⁾」という彼の主張は、正しいかに見える。だが、まさにそれ故に、観察された過去の規則性を離れるや、もはや「理論」の課題は成立しえなくなるのである。少なくともシュビートホフ自身はこの点を自覚していた。彼は注意深く自己の変動論の限界を指摘

することを忘れなかった。すなわち、その理論は「自由市場経済の高度資本主義経済様式^{スタイル}」の支配する時代(1822~1913年)の「現実型」たるにとどまり、したがって、それ以前と以後の時期ではかかる「現実型」からの「背離」は当然であり、「私の理論は過去あるいは未来の時期について妥当しないという異論²⁾が唱えられても見当はずれ」だ、と。

彼の変動論の主眼は、歴大な資料統計の蒐集・整序([29]に収録)を通じて景気循環の「現実型」を検出することであり、この「現実型」を、「斉一性」を基礎としてはじめて認識対象となりうるという理論観に基づき、「典型的循環」として彫琢することであった。彼が「変動段階」を含む「一経済変動[eine wirtschaftliche Wechsellage]」を「主循環」として捉え、説明をここに集中したのは、そのためである。こうした「典型的循環」という概念は、その後、「近代」景気諸理論家によってその起源を忘れるまでに無意識に利用される一般的用具となっているが、上のように方法論的顧慮から明確な規定を最初に与えたのは明らかにシュビートホフである。ただ、後の諸論者は、その概念の現実的基礎を遠く離れて論理的操作に馴む機能モデルとして使用することが多く、シュビートホフの用語法に従えば、「典型的循環」が「現実型」から「理想型」へ更に非経験的任意モデルへといったコースで勝手様々に理解されているだけである。

シュビートホフの方法的立場からすれば、ザリーンのような「生成と移行の諸法則」は、シュビートホフの変動論中に占める位置をもちえなかったものであり、その「理論の基礎」となった時期を離れば、ただ「現実型」たる「典型的循環」からの「背離」が主張されうるとどまるのである。それは客観的経済法則の否定の上で法則に代位するものとして形態的類型を構想するという方法的手続きからすれば自明の帰結であった。

確かに、シュビートホフもザリーンと同様その「背離」に触れて次のように指摘する；「兩次の世界大戦および戦争による諸結果の克服で一杯だった時期を度外視しても、その後の時期には重大な新事態が現われたが、こうした事態はこの最近の時期が従来のそれと同一の糸で綴られてよいものかどうか

か、過去の周期から帰結された観点が保持されうるのかどうか、を問題ならしめる³⁾」と。だが彼は回答を将来に繰り延べるだけである；「1919年に始まるこの周期が単に鈍重なそれ [Ermattungsspanne] にすぎないものか、それとも新たな経済様式への移行途上における変形周期 [Wandlungsspanne] であるかについては、将来の教えるところである。あとのケースであるとすれば、新たな様式の不均衡が新たな理論の取り組むべき課題とされるにちがいない⁴⁾」。彼の「典型的循環」は、「自由市場経済的・高度資本主義経済様式」との不可分性が力説されていたのであるが、これについては具体的内容規定が与えられていた訳ではない。だから、シュピートホフが彼の変動論の現実適応性に言及して「決定的な問題は経済様式が最終的にそして決定的に変化したのかどうかである⁵⁾」と述べたところで、それは有意味ではありえない。「資本主義が本質的な点で変化したか」と問うためには、歴史過程一般の客観的發展法則の把握(史的唯物論)に立つ「資本の一般的分析」(『資本論』)を経なければならぬのである。なぜなら、「資本主義的生産のいっそう具体的な諸形態を包括的に叙述することは、資本の一般的な性質が把握された後に初めてできること⁶⁾」だからであり、経済変動こそは、資本主義的生産の最も具体的な運動形態だからである。シュピートホフにおいては、この「資本の一般的な性質が把握⁷⁾」されないままに、「天体の外観的運動」が直接問題とされたというべきであろう。

では、「資本の一般的な性質」を知る者にとって問題は如何に提起されるべきであろうか？資本主義的生産の歴史過程を貫くいっそう具体的な發展法則を、循環的運動と構造的変動との交錯、循環運動に媒介されてもたらされる構造変動という視角から確証すべきこと、——われわれの課題は、こう設定されねばならない。この点で、シュピートホフの「大律動」＝「変動周期」は、それが資料的事実に裏づけられながら説明を留保されていただけに逆に注目すべきである。実は、こうした資本主義的構造変動に関しては、ごく早期から鋭敏な論者によって感知されていた。すなわち、F. エンゲルスは早くも1894年の段階で、世界市場の創出とその編成替えという点に注目してこの間

題に言及していたし、⁸⁾1902年には、カウツキー(Karl Kautsky, 1854~1938)ですら、パルヴス(Alexander I. Helphand [Parvus] 1867~1924)に依って、資本主義的循環と構造的転換との関連を生産力の質的飛躍の面から説こうと努めていた。⁹⁾だが、世紀転換後のドイツマルクス学派はこの論点を深める代りに自己の課題を景気循環の局面交代の説明にのみ集中したのである。¹⁰⁾この意味あいにおいてのみ、マルクスによる資本主義分析の真のねらいをこの制度の進化と崩壊に認めたあの伶俐なシュムペーターの次の指摘は、われわれと共通するものを伝えている。「これ故に、マルクスにとっては、時間の経過とともに恐慌がその強度を加えるであろうと仮定すること、また可能ならばこれを証明することが、本質的であった。このテーゼは、ヒルファードィングによって捨てられたし(1910年)、また<1911年>には最も苦心した擁護論を掲げていたカウツキーによっても、結局は捨てられたものである」¹¹⁾。経済変動論の研究が真に今日的有効性をもちうるためには、この「捨てられたもの」を拾いあげ理論的再構成を計ることによって以外にはない。「世界市場恐慌」論は、この方向において構想されねばならないのである。

- 1) A. Spiethoff, The "Historical" Character of Economic Theories, op. cit., p. 139
- 2) A. Spiethoff, *Die Wirtschaftlichen Wechsellagen*, a. a. O., S. 13
- 3) A. Spiethoff, ebenda, S. 13
- 4) A. Spiethoff, ebenda, S. 14
- 5) A. Spiethoff, ebenda, S. 13
- 6) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. III, *M-E Werke*, Bd. 25, S. 120
- 7) K. Marx, *Das Kapital* Bd. I, *M-E Werke*, Bd. 23, S. 335
- 8) F. Engels, in: *Das Kapital* Bd. III, *M-E Werke*, Bd. 25, S. 506
- 9) K. Kautsky, *Krisentheorien*, *Die Neue Zeit*, 20 Jahrg., Bd. 2, Stuttgart, 1902, SS. 137~138
- 10) 拙稿「恐慌論の一面化過程の分析——第一次大戦前夜の『恐慌=再生産論争』をめぐって」(前掲)
- 11) J. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, op. cit., p. 1132: 東畑精一訳, 第6巻, 2383頁。カウツキーについては、シュムペーターの原文では「1902年」と記されているが、カウツキーの恐慌認識の転換は明らかにその論稿(*Finanzkapital und Krisen*, *Die Neue Zeit*, 29 Jahrg., Bd. 1, 1911)に認められるので訂正した。この点については、前掲拙稿94—97頁を参照されたい。